
華と赤ブドウ酒

Lily

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華と赤ブドウ酒

【Nコード】

N2983X

【作者名】

Lily

【あらすじ】

植物の因子を持った人間、アルラウネ。その種族は、ある日滅ぼされた。たった1人を残して。十年後、アルルーナは復讐のため、ある都市にやって来た。

『プロローグ』

完全な闇の中で、アルルーナは耳を澄ませてじっと待っていた。待ちわびていた足音が聞こえ、小屋の戸の開く音が、静寂を破った。小屋の中に入って来たのは、いつもと変わらぬ姿の少年、ディーンだ。緑色の長髪を一つに結んで、長い前髪からは黄緑色の瞳が覗いている。アルルーナは、自分より頭一つ分大きいディーンの身長に憧れていた。

「これ、今日の水」

ディーンがにっこりと笑い、ランプと、水の入った桶をアルルーナの前に置いた。澄んだ綺麗な水が、痩せて頬がこけたアルルーナの顔を映していた。頭部に咲いた花と葉は萎れて、茶色みを帯びていた。アルルーナの目から涙が零れ落ち、水の中に落ちて小さな波紋を作った。

「泣かないで。君は、僕が守るから」

色白のディーンの指が、アルルーナの涙を拭った。アルルーナが彼の優しさに触れられるのも、今夜で最期だ。いつのまにかアルルーナは顔をディーンの胸に埋めて、まるで赤子のように泣いていた。ディーンはずっと、何も言わずアルルーナの傍にいた。

どれくらい時間が経ったか分からなくなった頃、不意にディーン表情が陰しくなった。

「村に、誰か近づいて来てる」

ここで待ってて、と言いつ残し、ディーンは小屋から出て行った。

ここに来ていたことがばれないように、鍵をかけて。

アルルーナはずっとディーンが戻ってくるのを待っていた。水を飲もうかと思ったけど、ディーンが戻って来たときのために残しておこうと決めた。

ランプの明かりが消えた頃、火が爆ぜる音が大きく響いた。小屋の壁に火が点いていた。火は瞬く間に燃え広がり、アルルーナはまだ燃えていない戸を全力で叩いた。やがて、煙で目を開けることも、呼吸をすることも困難になって来た。それでも、アルルーナは戸を叩き、叫び続けた。死にたくない、それだけがアルルーナの頭にあった。

戸に火が燃え移り、アルルーナは炎に囲まれた。肉が焦げる臭いがして、背中に激痛が走った。火は容赦なく迫ってくる。熱くて、痛くて、声にならない悲鳴を上げた。

すると突然、火が消えた。黒く煤けた木の断片を残して無くなっていた。

アルルーナは痛む体を動かして、小屋だった場所から出た。

そこでアルルーナが見たものは、この先忘れることはないだろう。

【プロローグ】（後書き）

完結できるように頑張りたいと思います

【アルラウネ】

「……さん……お客さん！」

目を開けると、心配そうな顔をしたおじさんがいた。

「大丈夫かい？ うなされてたよ」

「あ、はい、大丈夫です。起こしていただいてありがとうございます」

アルルーナはぺこりと頭を下げた。

どうやら、馬車の中で眠ってしまったようだ。

「ラルヴァに着いたよ」

おじさんが馬車の外を指さした。馬車から身を乗り出すと、高い壁に囲まれた大きな街が見えた。

アルルーナはおじさんに運賃を渡して、馬車を下りた。

馬車はすぐに走り出し、やがて見えなくなった。

馬車の主は優しいおじさんだった。

格安で乗せてくれたし、ラルヴァについての情報もたくさん教えてもらった。

ラルヴァは別名、『要塞都市』だ。

中央には王が住む城が聳え立ち、周りには複雑に入れ組んだ街並みが見える。

街を囲んだ壁はとても高く、登ることは不可能だろう。

そう、魔術を使わない限りは。

だが、『要塞都市』と言われるからには侵入妨害の結界ぐらい張

っている。

おじさんの情報では、いままで破られたことはないらしい。
目を凝らして見ると、透明の膜が都市の周りに張られているのが見える。

綻びのない綺麗な結界だ。

一般の人間には結界は見えない。

見えるのは中級以上の魔術師だけだ。

すなわち、結界が見える私は上級の魔術師だ。

しかし、上級の魔導師がゆえに地方での仕事は簡単すぎて遣り甲斐が無い。

だから上京して遣り甲斐のある仕事を探しに来たのだ。

……もちろん、目的はそれだけではないが。

とにかく、仕事を探すならまずギルドだ。

アルルーナは軽い足取りでラルヴァに向かった。

すぐ、ラルヴァは本当に大きい都市だと実感した。

城壁までまだ距離があるのに、もう端が見えない。

数十分歩いてやっと門に着いたが、これもまた巨人も楽々通れそうなほど大きい。

見上げていると首が痛くなった。

門からは様々な人たちが出入りしている。

大きく分けて、ベスティアと呼ばれる動物の因子を持った人々と、因子を持たない人間だ。

ベスティアは個体の体格差が大きく、それぞれ持っている因子も幅広いものだが、人間は皆同じ形をしている。

左右に分かれて門番をしているのはベスティアのようなだ。

右の方は縞々の長い尻尾をゆらゆらと揺らし、左の方は大きな翼が生えている。

右の門番は出て行く人の手形を確認しているようなので、アルルーナは左の列に並んだ。

「あら、あなた。それどこで買ったの？」

声の主は、前に並んでいた女性だった。

左の頬に赤い鱗が生え、同じ色の瞳孔は丸い。

多分蛇の因子を持っているんだろう。

女性はアルルーナの頭部を物欲しそうな目で見ている。

アルルーナは首を傾げた。

「その髪飾りよ。色も綺麗だし、まるで本物みたいじゃない」

「こ、これは……その、貰ったんです」

「へえ、恋人？」

「知人です！」

蛇の女性は意地の悪い笑みを浮かべている。

この人、性格も蛇だな。

「おい、次」

「あら、じゃあまたね」

門番に呼ばれて、蛇の女性が手形を見せに行った。

ふう、助かった。

蛇の女性が行った後、アルルーナも手形を見せ、都市の中に入
った。

目指すはギルドだ。

迷路のような道を人の流れに沿って歩いていくと、人だかりが目
についた。

人の壁を割って前まで行くと、そこでは二人が互いに戦っていた。一人は体の大きい男性で、剣を振り回している。

もう一人は女性で、剣を華麗にかわして男性に殴る蹴るの暴行を加えている。

女性の方は犬科動物のベスティアだろう、それに似た尻尾が生えている。

女性が男性の顔面に蹴りを入れると、野次馬から歓声が上がった。田舎にはこういうのが無かったから、何が目的で戦っているのか分からない。

ただの手合わせなら、あそこまで叩きのめす必要はない。

「すいません、ちょっとお聞きしてもよろしいですか？」

隣にいた青年に聞いてみた。

「なんだい？」

「彼らは何故戦っているのですか？」

「ああ、ラルヴァは初めてか。彼女はシリル。『大鷲の影』ってギルドのマスターで、ギルド破りと対決中さ」

そうなんですか、とアルルーナは納得した。

ギルド破りとは、マスターの座をかけて現マスターに戦いを挑む連中の事だ。

ラルヴァでは日常茶飯事で、賭け事の対象になっているんだとか。野次馬がまた歓声を上げた。

男性の剣が、雷を纏い始めたのだ。どうやら魔術師だったようだ。見た目通り力押しするタイプだと思ったのに。

シリルはそれに臆することもなく、目にも止まらぬ速さで回し蹴

りを決めた。

男性は白目を剥いて気絶し、剣は男性の手を離れると、すっと雷が消えた。

「ふん、この程度か。他に挑戦者は？」

シリルは野次馬をゆっくり見廻した。

誰も名乗り出ない。

「なんだ、誰もいないのか。……ん？ そこのお嬢さん、あたしと戦ってみないか？」

野次馬たちの視線が一斉にアルルーナに注がれた。

私が選ばれる要因ってどこにあったんだろう？

中々出てこないアルルーナに、シリルは挑発するように言った。

「見たところ魔力は凄いいみたいだけど、怖いのか？」

怖いの？ と言われて、ちょっと腹が立った。

アルルーナはシリルの前に出た。

「武器は？」

シリルは馬鹿にしたように言った。

「武器なんか無くても、あなたくらいなら楽に倒せます」

「へーえ、面白い事言ってくれるじゃないか」

シリルは笑うと、一気に間合いを詰めてきた。

拳が迫って来たが、アルルーナは魔術で木を操り、シリルを枝で殴った。

彼女は横に吹っ飛んでギルドの壁に激突した。

「植物には何者も勝てないんですよ」

アルルーナはその場を後にした。

ギルドの質はマスターの質だ。

マスターが弱いギルドなんて、高が知れてる。

少なくとも私と同じかそれ以上じゃないと、私が求めるような仕事は入ってこない。

再び迷路のように入り組んだ道を歩き、いくつかギルドを回ったが、これといったものが見つからない。

世の中そううまくいかないものだ。

回っていないのは残り一つになってしまった。

ラルヴァの最北に、そのギルドはある。

近づくにつれてだんだんと人の気配は無くなっていき、ギルドの前まで来たときにはもう誰もいなかった。

木の看板に装飾文字で『フオンスフラワー花の泉』と書いており、柱には蔓バラが咲いている。

両開きの扉は開いていて、中には人が全然いない。

アルルーナはギルドに足を踏み入れた。

突然、ナイフが前方から飛んできた。

首を傾けてそれを避けると、拍手が送られてきた。

「我輩のナイフを避けるとは、魔術で三倍速にしていたのだがな」

オレンジ色の髪をした壮年の人間の男がカウンターの上で胡坐をかいていた。

「私じゃなかったら刺さってましたよ」

「心配ご無用、刺さる前に止める。さて、『フオンズフラワー花の泉』にようこそ」

「あなたがマスターですか？」

「いかにも。我輩は『フオンズフラワー花の泉』のマスター、シュナイダー・ハベリオンだ」

どこかで聞いたことのある名だ。

「もしかして、『疾風』ですか？」

「いかにも」

シュナイダーがジョッキに酒を注いだ。

彼は私と同じ上級魔術師で、田舎にまで名が届くほどの腕を持っている。

ギルドを立ち上げたと風の噂で聞いたが、まさかこんな寂れたギルドだったとは。

でも、見る限り彼の魔力はアルルーナと同等だ。是非ともギルドに入らせてもらいたい。

「私をあなたのギルドに入れてください」

「いいとも。我輩のナイフを避けるような魔術師を迎えることが出来て光栄だ」

「ありがとうございます！」

「ところで、君の名は？」

「アルルーナです。田舎では『樹海』と呼ばれていました」

シュナイダーが酒を吹きだした。

顔が引きつっている。

「そ、そなたがああ『樹海』か」

「そうですが、何か？」

「いや、何でもない」

シュナイダーがカウンターから降り、ポケットからペンダントを出した。

「我がギルドのメンバーである証だ」

手渡されたそれは、平らな赤い石に薔薇の彫刻が施され、真ん中に看板と同じ装飾文字で『花の泉』フオンスフラワーと書かれていた。

アルルーナは礼を言って早速掲示板に向かい、依頼書とにらめっこした。

さすが『疾風』がマスターのギルドというべきか、ランクは上級がほとんどで中級と下級の依頼は全然ない。

普通のギルドに行かない上級の依頼がこちらに来ているのだろう。

「どうだ？ 『樹海』には少し簡単すぎるか？」

「そうですねえ……。もう少し上のランクの依頼があればいいんですけど」

「ははっ、頼もしい事を言ってくれる！」

シュナイダーは酔っているのかひとしきり笑った後、何処かへ行った。

酒を取りに行ったのだろう。

アルルーナは再び掲示板に視線を戻した。

どれにしようか悩んでいると、不意に背後から声をかけられた。振り向くと、細長い棒……じゃなくて、ひよろつとした男が立っていた。

黒い短髪に青い目、小麦色の肌をしていて、棒みたいな事を除けば腕っ節が強そうだ。

男は何故かアルルーナの頭部を凝視している。

「私に何か用ですか？」

「ここでは話せない。着いてきてほしい」

男は踵を返し、ギルドの外へ出て行こうとしたので、アルルーナもそれに着いていった。

人がいないギルドの建物の後ろに来て男が足を止め、振り返った。

「俺はフリード、薬師だ。あんたに聞きたい事がある」

「何でしょう？」

「ちょっと耳貸せ」

フリードの目が一瞬光ったような気がしたが、気にせずアルルーナは言われたとおりに耳を近づけた。

「あんた、アルラウネだろ」

冷や汗が頬を伝った。フリードはにやりと笑った。

「やっぱり、本当だったか」

「どうして……!？」

睨みつけると、フリードは肩をすくめた。

「その花に緑色の髪、ご丁寧に葉っぱまで垂れてる。アルラウネの特徴そのものじゃないか」

「こ、これは飾りです!」

アルルーナは耳の上を押さえた。左右のそこには桃色の大輪の花が咲き、葉が二枚ずつ耳を覆うようにして垂れている。

これらは、アルルーナの頭に生えている。

アルラウネとは、植物の因子を持った人間の事だ。

フリードが言ったように、緑色の髪と頭部に咲いた花が特徴だ。

だが、十年前に絶滅した。

生き残りがいるなど、私以外知らないことだ。

アルルーナの手で覆いきれない花弁を、フリードが引っ張った。

鋭い痛みが走って、思わず悲鳴を上げた。

「す、すまん! 痛がるとは思わなかった!」

フリードは素早く花弁から手を離し、土下座した。

「なんで、花を筆ろうとしたんですか!？」 花はアルラウネにとって命に等しいんですよ!」

「本当にすまん!」

フリードが頭を地面に擦り付けた。

さすがに自分が悪いような気になってきて、アルルーナはフリードを立たせた。

「なんで、花を筆ろうとしたんですか?」

アルルーナは同じ質問を口にした。

「実は、俺の夢が万能薬を作る事なんだ。それで、アルラウネの花がどうしても必要で……でも、十年前に村が消えてからぱったりいなくなつて。ずっと探してたんだ」

万能薬か、成程。

アルラウネの花はどんな薬にも毒にもなる。

「確かにアルラウネは私以外いません。でも、花は絶対にあげません。欲しいなら自然に花卉が落ちるまで待ってください」

「どれくらいかかるんだ?」

「分かりません。あと十年ぐらいしたら一枚くらい落ちると思います」

アルラウネは、年を重ねると周期的に花卉が少しずつ散っていき、完全に無くなると死ぬ。

逆にいえば、花びらを雫ればその分寿命が縮むのだ。

「十年！？ そんなに待ってられない！」

「じゃあ、諦めてください」

アルルーナは踵を返し、すたすたと歩き出した。

するとフリードが道を塞ぐようにアルルーナの前に立ちはだかった。

「何でもするから、その花をくれ」

フリードの目は真剣そのものだった。

アルルーナはため息をついて、フリードに小さな瓶を手渡した。中には乳白色の液体が半分くらいまで入っている。

「これを飲んだら、考えてあげてもいいです」

「毒……じゃないよな？」

フリードは疑わしげに小瓶を見た。

当然の反応だ。

アルルーナは微笑んだ。

「人体に影響はありません」

「……わかった」

フリードは瓶の蓋を開け、中の液体を一気に喉に流し込んだ。途端に、目から生気が消えた。

フリードに飲ませたのは私特製の自白剤だ。

アルラウネはその希少さと花の恩恵から、ずっと密猟の危機にさらされてきた。

十年前に滅んだ時から、その価値は一気に上がった。

いままでも私を騙して花を奪おうとした輩は沢山いたのだ。

この男が自分にとって害があるなら、早めに始末しておいた方がいい。

「それでは、聞きます。あなたは、何のために花を使うのですか？」

「万能薬を作るため」

フリードは抑揚のない声で言った。

「花はあげないと言ったら、どうしますか？」

「話して説得する」

予想外の答えだった。

「あなたが作ろうとしている薬は、……人の役に立つものですか？」

フリードは首を縦に振った。

アルルーナはフリードを覚醒させるためにフリードの頬を思いっきりひっぱたいた。

【依頼】

「痛て！ 何が起きた！？ あんた俺に何飲ませたんだ！？」

意識が戻ったフリードは赤く腫れた頬に手をあてた。くっきりと手形がついている。

「ただの水です、人体に影響はありませんよ。いきなりぼーとしちゃうものですから、心配になって起こしたんです」

「嘘だな」

「本当ですよ。何か不調でもありますか？」

「いや……ない」

フリードは首を傾げた。

アルルーナは心の中でほくそ笑んだ。

あの自白剤は自信作だ、体に何の後遺症も残さない。

「というか、早く渡せ」

フリードが催促するように手を差し出した。
はて、アルルーナは首を傾げた。

「花だ。あの水を飲んだら渡してくれるといっただろう？」

「私は考えてあげてもいい、と言ったんです。花をあげるなんて一言も言ってません」

「……詐欺だ」

「私は騙してなどいません。あなたが勝手に思い込んだんでしょ？」

フリードは何か反論しようとしたが、口を噤んだ。

「とにかく、今すぐには渡せません。花が欲しいなら待って下さい」

アルルーナはフリードを避けて、ギルドの掲示板の前まで戻って来た。

ふと、ある依頼書が目に入った。

ランクは上の中、ハイマメという草の採取だ。
ただの採取だが、ランクが高い。

「それはやめておけ」

振り返ると、フリードがいた。

「ご心配なく。私にはこれくらいが丁度いいんです」

アルルーナは依頼書を掲示板からはがし、シュナイダーに見せた。

「ほお、ハイマメの採取か。『樹海』に心配はいらぬな。頑張っている」

「はい！ 行ってきます！」

アルルーナはギルドを出た。

ハイマメの採取は『鈴の森』という場所で採れるらしい。

地図を見てみると、ラルヴァからは馬で半日くらいのところにあった。

だが、馬は貴族しか乗ってはいけないのだ。

なんでも、平民は楽をしてはいけないうの国王のお達しだそう。そこで使うのが、機械仕掛けの馬だ。

魔力を動力としており、誰でも動かせる。

おまけに、乗ろうと思えば魔力が削られるので、楽をしていることにはならない。

ラルヴァに来るまで乗っていた馬車も、機械仕掛けの馬で動かしていた。

どこで売っているのかは馬車のおじさんに聞いていたので、アルルーナはそこに向かった。

ギルドから東に2キロほど歩くと、その店はあった。

鉄を叩く音や、加工する音が絶えず響いていて、まるで店が一つの楽器のようだった。

少し開いたドアから中を覗くと、筋骨隆々のおじさんが煙草をふかしながら丸椅子に座っていた。

おじさんはアルルーナに気付くと、紙とペンを素早く取り出した。

「いらっしやい！ お父さんのお使いかい？」

「自分専用のを買いに来たんです」

「なんだ、新人さんか」

おじさんはがっかりしたように、紙とペンを置いた。

ギルドに入ったばかりの新人は貧乏が当たり前なのだ。

「この店で一番性能のいい馬をください」

「お嬢ちゃんが買えるようなもんじゃない」

おじさんは、貧乏人には用はないと言わんばかりに手を振った。

「新人だったらの話でしょう？ 私は『樹海』です。金貨なら何枚か持ってますよ」

財布から金貨を取り出して見せると、おじさんは驚いた顔をしてすぐに思案顔になった。

しばらくして、指を二本立てた。

「金貨二枚だ」

「高いですね。金貨一枚でどうです？」

「俺の店を潰す気か？ 大負けに負けて金貨一枚と銀貨八枚だ」

「金貨一枚と銀貨一枚で」

「『樹海』がケチるんじゃない」

「慎重と言ってください。金貨一枚と銀貨二枚で」

おじさんは難しい顔で唸り、丸椅子から立ち上がってアルルーナに指を突き付けた。

「俺と勝負しろ、嬢ちゃんが勝ったら金貨一枚にする！ 俺が勝ったら金貨二枚だ！」

「私に勝てると思ってるんですか？」

アルルーナはおじさんを嘲りを込めた眼差しで見た。
こういう賭け事は田舎でもよくあった。

おじさんはアルルーナの態度に憤慨し、表に出ろ！ と大声で叫んだ。

アルルーナは店の外に出ると、おじさんと対峙した。

おじさんの手には大きな斧が握られていた。

アルルーナでは持ちあげること出来ないだろう。

おじさんは大きく振りかぶると、斧をアルルーナめがけて投げた。
アルルーナは身を屈めて斧を避け、木を操って斧の柄を掴み、おじさんに投げ返した。

斧はおじさんの首に小さな傷を作って、道に深々と突き刺さった。

「まだやりますか？」

アルルーナは脅しも兼ねて木を揺らした。

「……ラルヴァーの斧使いと言われてたんだがなあ」

おじさんは頭を抱えて俯いた。

「私の勝ちですね」

「仕方ない、負けは負けだ。約束通り金貨一枚だ！」

「ありがとうございます」

おじさんは馬を取りに、店の奥に消えた。

再び出てきたときには、大きな漆黒の馬を連れていた。

機械仕掛けの馬は普通の馬と外見はそう変わらない。

違うところがあるとすれば、草ではなく魔力を食べることだろう。そして、持ち主には絶対服従だ。

アルルーナは心なしか佯しげな顔をしたおじさんに代金を払い、店を出た。

馬の背に届かないのでジャンプして馬に跨り、ラルヴァの北口から外に出た。

ラルヴァは壁に遮られて自然の風が全く吹かないが、外に出ると少し寒いくらいの風が頭の花を揺らす。

そして、太陽の光を遮るものが何もない！

「光合成万歳！」

アルラウネは緑色の髪と葉で光合成をするのだ。

髪は長ければ長いほど良い。

だが、正体がばれないように肩のあたりまで切ったのだ。

おかげで作れる栄養分が減ったが、誰にもばれることは無くなった。

そう、フリード以外は。

そう言えば、この依頼はやめておけと言っていた。

そんなに弱く見られていたのかと思うと、無性に腹が立ってきた。絶対にその鼻を明かしてやる！ アルルーナは馬に魔力を食べさせて、馬を駆った。

馬はどんどんスピードを上げて、草原を駆けた。

さすが店一番の馬だけある。

前に使っていた馬よりも速い。

途中に何度も日光浴をはさんだが、予定していた半日よりも早く、『鈴の森』に着いた。

『鈴の森』は、いわば一つの音楽隊のようだ。

首を上げなければ見えないほど高くに繁った針葉には、大小さまざまな鈴が生えていて、風が吹くごとにそれぞれ違う澄んだ音色を奏でた。

「あの鈴は葉になるんだ」

背後から声がした。

アルルーナは反射的に、声のした方に魔術をかけた。

地面に生えている背の低い草を一気に成長させ、長くなった草で対象を拘束した。

拘束された対象は――フリードだった。

草を切ろうと噛み付いている。

「何故、ここにいますか？」

「あんたが日光浴してる間に先回りした」

「……そうですか」

アルルーナはため息交じりに頭を振り、魔術を解いた。

草はフリードから離れると、その大きさのまま地面に垂れた。

「私に用があるなら、ラルヴァで言ってくればよかったんですが」

「俺は北の出口で待ってた。アルラウネが馬を使うなんて思わなかったしな」

「よく習性をご存じなんですネ。ですが、私は普通のアルラウネとは違いますので、馬だって乗れますよ」

アルラウネは、植物の因子を持っているからか地面を離れることを嫌う。

普通なら馬に乗るのは泣いて嫌がる。

だが、もし密猟者に会って馬に乗る事を拒否すれば、花を失うのは火を見るより明らかだ。

生き残りたければ、高所恐怖症は克服するしかない。

馬に乗るのを怖がっていた幼いころの自分を思い出して、アルルーナは自嘲した。

「それより、ハイマメがどこにあるのか知ってるのか？　なんなら教えてやってもいいぞ。銀貨一枚で」

「結構です。森に聞けば分かりますから」

フリードは疑いの視線をアルルーナに向けた。

気付かないふりをして、一番近い木の幹に手をあて、目を閉じた。正確には木に聞く、というよりも木の魔力で形成された精霊に聞く。

意志を持っているので、簡単な質問には答えてくれる。

ハイマメがどこにあるのか聞くと、すぐに答えが返って来た。

一番近いものは、ここより西に少し歩いたところだ。

アルルーナは教えてくれた木に礼を言っ、馬にここで待っているように命令した。

森の中に歩き出すと、フリードがアルルーナの隣に来た。

鬱陶しい。

「そう言えば、何で着いてこようと思ったんですか？」

自白剤を飲ました時には話して説得すると言っていたはず――ア

ルルーナは喉まで出かかった言葉をあわてて飲み込んだ。
「自白剤を飲ましたなんて知れたら即刻逮捕だ。」

「その花卉が落ちたら、真っ先に俺がいただくためだ」

……呆れた。思わず笑ってしまった。

「笑うな」

「ふふっ……：すいません。何年かかるか分かりませんよ？」

「あんた以外アラウネはいないんだろ？ 手に入るんだから、十年、二十年待つくらい安いもんさ」

「珍しい考えをお持ちなんですね。普通は待てずに力づくで奪おうとするものですよ」

アルルーナは頭部の花を斬り落とす仕草をした。
フリードは顔をしかめた。

「俺がそんなに野蛮に見えるか？」

「最初は花につく害虫かと思いました」

「……ひどいな」

「今は腐った水にランクが上がってます。あ、ハイマメがありましたよ」

アルルーナが指さした先には、ギルドの建物くらいはありそうな

植物が生えている。

先には薄緑色の袋が生っており、重さで茎が曲がっている。

あの袋の中にハイマメが入っているのだ。

袋は鉄のように硬く、飛び道具を投げたぐらいでは開かない。

それに、もし開いてもハイマメが弾けるように飛ぶので凶器とな
りえる。

さて、フリードのお手並み拝見といこうか。

「フリードさん——どうしたんですか？」

木の陰で、フリードが土を弄っていた。

なんだか黒いオーラが出ているような気がする。

「……害虫も、腐った水も悪い事には変わらねえぞ」

「あ、すいません。そんなに打たれ弱いとは思いませんでした。

そんなことより、ハイマメを採ってくれませんか？」

「銀貨一枚」

「やっぱりやめます。自分で採ります」

自分と同じぐらいの太さの茎に触れ、目を閉じた。

命令して、袋を開かせるのだ。

これも魔術だ。

ゆっくりと袋が開き、ハイマメが数粒零れ落ちた。

勢いよく開かなければ弾ける心配はない。

次に閉じるように命令すると、開いた時と同じようにゆっくりと
閉じた。

アルルーナは袋から落ちたハイマメを拾い上げた。

小石ほどの大きさの実だ。

フリードもいそいそとハイマメを拾っている。

アルルーナはフリードの足を蹴り、痛がっているフリードを横目に彼の手から落ちたハイマメを拾った。

「少しくらいいいじゃないか」

「駄目です、これは私が採ったんですから。欲しいなら自分で採ってください」

フリードは悪態をついて、太くてつるつるした茎を器用に登り始めた。

袋に到達しそうになった時、咆哮が轟いた。

急に辺りが暗くなった。

見上げると、巨大な生き物が空中を舞っていた。

暗くなったのは、その生き物の影にいるからだだった。

また大きな咆哮を上げて、その生き物が周りの木をなぎ倒して地面に降り立った。

倒された木の鈴が最後にリン、と鳴り、それきり風が吹いても鳴らなくなった。

その生き物は歯をむき出して威嚇している。

四枚の翼は丁寧にたたまれ、鋭く尖った爪には幾度もの戦いの跡が刻まれている。

巨大な体をびっしりと覆ったオレンジ色に光る鱗は何とも美しく、つい見とれてしまう程だった。

百年ほど前から姿を消して、絵でしか見られない生き物だと思われる。

「ドラゴンさんですか」

「我輩はドラゴンなどと言う人間の呼び方は好かぬ」

ドラゴンは苛立ちを隠さずに言った。

「では、何と呼べば？」

「呼び名など、些細なことはどうでもよい。その豆は置いていけ。それは我輩の大切な食糧なのだ」

このドラゴンは草食だったのか。
表情には出さなかったが、驚いた。

「私も生活がかかってるんです。別に良いじゃありませんか、ほんの数粒だけですよ」

「おい！ おとなしくハイマメを渡せ！ 相手はドラゴンだぞ！」

フリードが茎の上で叫んだ。

「その呼び方は好かぬと言ったはずだ！」

ドラゴンの尻尾がアルルーナの頭の上をかすめた。

茎の上にいたはずのフリードの姿は無く、地面に叩きつけられて半分埋まっていた。

「あの者のようになりたくなければ、その豆を置いていけ」

ドラゴンは唸るように言った。

「嫌です。置いていって欲しければ、力づくでそうさせてください」

「いよ、ドラゴンさん」

ドラゴンが、今までで一番大きな咆哮を上げた。
咆哮は刃となり、木や葉を切り刻んだ。
風を操る魔術の一種だ。

「そんなので私を倒せると思ったら、大間違いですよ」

アルルーナは周りの木々を操り、鈴を鳴らした。

鈴同士が共鳴して、どんどん大きな音になって行った。

ドラゴンはアラウネの数倍、耳がいい。

鈴の楽団には勝てないだろう。

ドラゴンは空に飛んだが、そんなことは計算済みだ。

木の枝が届かない場所まで行く前に、ドラゴンの頭部めがけて木の枝を振り下ろした。

勿論、折れないように補強してある。

ドラゴンは頭から地面に激突し、痙攣した後動かなくなった。

「植物には何者も勝てないですよ」

アルルーナはそう言って、ドラゴンがなぎ倒した木を再び真っ直ぐに埋め直した。

しばらくして、ドラゴンが頭を擡げた。

「気分はどうですか？」

アルルーナが聞くと、ドラゴンはぷいっと顔を背けた。

「最悪だ」

「それは良かったです。ところで、ギルドは放っておいて大丈夫なんですか？」

ドラゴンは目だけをこちらに向けた。

「……何の話だ？」

「しらばくれるつもりですか？ シュナイダー・ハベリオンさん」

ドラゴンが目を見開いた。

「どうしてわかった？」

「ただの勘です」

ドラゴンが笑った。

あやうく吹き飛ばされそうになった。

ドラゴンの体は輝き始め、どんどん小さくなっていった。

やがて人の形になると、光は消えた。

そこには、胡坐をかいているシュナイダーの姿があった。

「さすが、我輩の認めた魔術師だ」

「ありがとうございます」

「フリードは生きておるかの？」

「生きていると思いますよ。起こしてきます」

アルルーナはフリードを仰向けにして、口に赤い液体を流し込ん

だ。

「ぐああああ！ 辛っ！！」

飲ましたのは、例え気絶していても起こせるように作った薬――の試作段階の物だ。

フリードは顔を真っ赤にして転げまわっていて、今なら火も吹けそうだ。

こんな薬は飲めないな。

どうやら失敗だったようだ。

「おい！ あんた俺に何飲ませたんだ！？」

フリードの目尻には涙がたまっていた。

「ただの栄養剤です」

「ただの栄養剤がこんなに辛いわけあるか！」

「辛いもの嫌いなんですか？」

「いや、嫌いではないな……って、ごまかすな！」

フリードがまた叫びながら転がり出した。

相当辛かったのだろう。

このままだとせっかく平らに直した地面がまたでこぼこになりそうだ。

だが、いつのまにか来ていたシュナイダーがフリードを足蹴にしてお止めた。

「我輩の一撃をくらっても気絶だけか」

「へ？ マスター？」

フリードがぽかんと口を開けた。

「我輩がお前を気絶させた」

「じゃ、じゃあマスターがあのだ……」

シュナイダーがフリードを睨みつけた。

これが本物の、『ドラゴンに睨まれた人間』だ。

ドラゴンは本来肉食で、主に人間を捕食していた生き物だ。

シュナイダーのように草食のドラゴンはかなり珍しい。

睨まれたフリードは縮み上がり、無言でこくこくと頷いた。

シュナイダーはそれを見て満足げに笑った。

「シュナイダーさん。どうして『鈴の森』にまで来たんです？
もしかして本当にハイマメを取られるのが嫌だったんですか？」

「『樹海』の実力を知りたくてな。元の姿なら本気が見られると
思っただ」

「そうですか。満足しましたか？」

「いや、殺気が無かった。あれは本気と言えぬ」

「……殺気が本気の証だと言うなら、シュナイダーさんは一生見
れませんか」

シュナイダーが目を細めた。

「どういう意味かな？」

「そのままの意味です。それより、このままだと日が暮れます。シュナイダーさんは元の姿で帰られるんですか？」

「そんなことをすれば王城の馬鹿どもに撃ち落とされよう」

「じゃあ、私の馬に乗りませんか？」

「そなたがよければ」

アルルーナは心の中で拳を振り上げた。

「馬は森の外に繋いでいるので、着いて来てください！」

「すまぬな」

アルルーナは喜々として歩き出した。

尊敬する人と一緒に馬に乗れるなんて！

森を抜けて、馬に魔力を食べさせようとすると、シュナイダーは自分がやると言い、手綱もとると言った。

律儀な人だ。

馬に乗ると、ふと何か忘れていた事に気付いた。

気付いたと言っても、何を忘れていたのか分からない。

まあ、そんなに大切なものではないだろう。

結局何を忘れていたのか分からないまま、ラルヴァへの帰路についた。

【行方不明者搜索】（前書き）

今回は短めです

【行方不明者搜索】

次の日ギルドに行くと、シュナイダーが神妙な顔で一枚の紙を凝視していた。

「おはようございます」

声をかけても、シュナイダーは何も答えず、ただ紙を凝視していた。

さて、このハイマメどうしよう。

これでは依頼が達成できない。

見廻してみると、カウンターには仏頂面のフリードがいた。

「フリードさんは、マスター代理さんですか？」

「ああ」

フリードはぶっきらぼうに答えた。

「では、これお願いします」

アルルーナはカウンターにハイマメの入った袋を置いた。

「……昨日、俺を置いていっただろ」

「はて？」

「俺を『鈴の森』に置いていったらう！？ 抜け出せなくて死ぬかと思ったぞ！！」

フリードは剣幕な表情でカウンターを叩いた。

よく見ると、フリードの目の下には隈が出来ていた。

それにしても、何故怒られなければならないのだろうか。

「私にはフリードさんを無事にラルヴァに帰す義務も義理もありません。それを知ってて着いて来たんじゃないんですか？」

「それは……」

「自分の身を守れないなら、ギルドを辞めて店でも始めたらどうですか？ 薬師ならそれなりの収入があると思いますけど」

フリードは下を向いて押し黙った。

これでいい。

ギルドでの仕事は時に危険を伴うので、自分の身も守れないような奴はギルドにいても意味がないのだ。

「俺は……アルラウネの花が手に入るまではギルドを辞めない」

顔を上げたフリードは真剣な表情をしていた。

「なら、八つ当たりはやめてくださいね」

「……すまなかった」

素直に頭を下げたフリードを、アルルーナは少し見直した。

「ところで、シュナイダーさんは何をしているのですか？」

「さあな、命令がどうか言ってたけど……。ああ、そうだ。今日は予定があるのか？」

「当分予定はありません」

「じゃあ、これ付き合ってくれ」

フリードが依頼書を出した。

行方不明者搜索、ランクは中の下だ。

報酬もあまりよくない。

アルルーナは依頼書をフリードに返した。

「遠慮しておきます」

「結構報酬いいと思うんだがなあ……」

「私くらいの魔術師になると、それくらい報酬は普通以下なんですよ」

「私くらいってなんだよ。……仕方ない。これでどうだ！」

フリードは赤い液体がなみなみ入った酒瓶を取り出した。

ラベルには大きく赤ブドウと書かれ、製造者は酒の神とまで呼ばれた人物だった。

生産量が少ないため、幻の酒とまで呼ばれた酒を！ まさか、この目で拝める日が来るとは！

「そっ、それ！ どこで手に入れたんですか！？」

「俺の知り合いに貰ったんだ。どうだ、協力してくれるか？」

フリードは酒瓶を高く持ち上げて、じらすように揺らした。
アルルーナは思わず涎が出そうになった。

「します！　いいえ、協力させてください！」

「取引成立、だな。詳細はこれ読んでくれ。これ酒蔵に置いてくるから」

「そんなこと言わずに今すぐ行きましょう！　歩きながら説明してください！」

アルルーナはフリードの手から酒瓶をもぎ取り、二重にした結界を酒瓶に張ってカウンターの上に置いた。

これで、誰も手出しできまい！

啞然としているフリードの手を引き、急ぎ足でギルドから出た。

早く詳細を読み上げるように急かすと、フリードは面倒くさそうに依頼書の説明を読みだした。

「三日前から十代の少年二人、昨日から二十代の女性一人が行方不明。都市内北部で全員失踪したので、そこを重点的に搜索してほしい……分かったか？」

「はい、行方不明者くらいこの私にかかれば一瞬で見つかります！」

アルルーナは近くの木に手をあて、目を閉じた。

精霊の情報網は恐ろしく広い。

さすがに城壁を超えた先の情報を得ることはできないが、ラルヴァ内のことならだいたい分かるはずだ。

半ば命令して、行方不明者に関する情報を吐かした。
だが、どれも有力な情報ではない。

「どうだ？ 何か分かったか？」

フリードが尋ねた。

「分かりません。それらしき人物を見た木や草もいるんですが、途中で消えちゃうんですよ」

「意味が分からん」

「おそらく姿を消す魔術を使ったか、ラルヴァの植物全体の記憶を削除したかです。実行犯はベスティアのようなので、後者は不可能ですけど」

「ベスティアは魔術が不得意だったな。じゃあ、仲間に人間もいたってことか」

「そうですね。ランクが低いと思っていましたけど、これは手強そうです。とりあえず、一番近い失踪現場に行きましょう」

「おう」

急ぎ足で現場に向かった。

人の少ない北部だと言われているだけあって、人っ子一人いなかった。

「じゃあ、魔力の痕跡でも探しましょうか。フリードさん、あちらをお願いします」

「……無理だ」

フリードの言葉に、アルルーナは耳を疑った。

魔力を目に映すことは出来なくても、感じるだけなら魔法が不得意なベスティアでも出来る。

人間ならなおさらだ。

「俺、魔力が無いんだよ」

「嘘はやめてください」

「本当だって、俺の魔力なんか見えないだろ!？」

「……確かに、見えませんが。馬はどうやって動かしていたんですか？」

フリードは小さな石を取り出した。

赤の淡い光を発している。

「魔石だ。見たことくらいあるだろう？」

そう言えば、師匠が魔力を溜めておけるとかで毎日磨いていた気がするな……。

フリードはどこからか調達した魔力を石に入れていたのだろう。

それにしても、魔力が無いってどういう事だ？　もしかして只者じゃないのかも。

だが、魔力を見ることはおろか感じることも出来ないなんてこの状況に置いてはただの役立たずだ。

「……聞き込みでもしておいてくださ……え？」

「どうした？」

フリードは怪訝そうな顔をした。

馬鹿！ そんなところにいたら焼け死ぬ！ 火が、炎が燃え盛っているのだ。

敷石の間から生えた草が一瞬で灰になった。

ゆっくり、地を這うように近づいてくる。

アルルーナは脱兎のごとく逃げ出した。

直後、頭に衝撃を感じて、目の前が真っ暗になった。

【首なしベスティア】（前書き）

更新が遅れました！

【首なしベスティア】

アルルーナは藁の上に寝かされていた。

天井が丸く、ドーム状になっている。

暗く、壁に取り付けられたちびた蠟燭だけがほんのり淡い光を放っていた。

ぱたぱたと、箒で床を叩くような音がする。

視線を向けると、黒い斑点のついた尻尾がゆらゆらと揺れているのが見えた。

「おっ、起きたか」

尻尾の動きが止まった。

体を起こして声の主を見ると、明るい顔の少年がいた。

明るい顔の少年はアルルーナの顔を覗き込むと、私の額を指で弾いた。

「いたっ！」

「ははっ、こぶになってら」

明るい顔の少年は再び額を指で弾こうとしたが、アルルーナは少年の手を払った。

「ここはどこなんですか？」

アルルーナは少し凄味を利かして言った。

すると、少年はさあな、とあっけらかんと答えた。

明るい顔の少年の後ろには、もう一人暗い顔をした少年が背を丸

めて藁の上に座っていた。

明るい顔の少年と同じ種類のベスティアだ。

暗い顔の少年は明るい顔の少年の肩越しにアルルーナを一瞥すると、背を丸めて俯むき、ぼそぼそと消えそうな声で言った。

「ここ……地下だよ。僕たち、気付いたらここにいた……」

「そうなんだよなあ。美味そうな肉が転がってると思ったら、頭の周りを星がぐるぐる回り出したんだ」

美味そうな肉……星がぐるぐる……私が見た火……、アルルーナは舌打ちした。

どうやらしてやられたようだ。

明るい顔の少年が見た物は魔術で作りだした幻だろう。

そして私が見た炎も同じだ。

幻で動揺させて、気絶させる……著しく卑怯だが、使い方によっては恐ろしい魔術と成りえる。

ところで、フリードは十代の少年二人が行方不明だと言っていたな。

明るい顔と暗い顔の少年は私たちが搜索していた行方不明者だろう。

とすれば、もう一人二十代の女性がいるはずだ。

アルルーナは辺りを見廻した。

といっても、暗くてほとんど何も見えないが。

少年たちに聞こうとしたが、明るい顔の少年は必死に笑いを堪え、暗い顔の少年はおろおろと視線を彷徨わせていて、答えてくれそうにない。

「あなた、珍しい人間ね」

首筋に何か生温かい物が這った。

思わず悲鳴を上げてその場を離れると、女性が蠟燭の火に照らされて、姿が露わになった。

左の頬に赤い鱗が生え、同じ色の瞳孔は丸い。

蛇の因子を持っているその女性は、昨日会った蛇の女性だった。先の割れた舌が出たり入ったりしている。

「体温が低いし、人間じゃないのかしら……あら、昨日の。髪飾りの女の子ね」

「み、見えてなかったんですか？」

「暗いと、体温だけで判断するしかないから。誰かまでは分からないわよ」

女性は肩を竦めた。

アルルーナはため息をついて、少年たちを睨みつけた。

「知っていたなら、教えて下さいよ」

「ははっ、面白そうだったからな！」

「そ、その……すいません」

明るい顔の少年は豪快に笑い、暗い顔の少年は消え入りそうな声で謝った。

「そうそう、あっちの方に出口あったけど、鉄格子がはめられて出れなかったわ」

女性が自分の後ろを指した。

黒々としていて、まるで地獄への入口のようだった。

「そこに、水とか植物とかがありましたか？」

「いいえ、無かったわ。それがどうかしたの？」

「私、魔術師なんです。水も植物もないならただのヒトですけど……」

アルルーナは自分で植物や水を作りだすことが出来ない。

私の魔術はあくまで操る事だけだ。

そう言うと、女性は肩を落とした。

「……とりあえず、鉄格子のどこまで行かない？ 何かアイディアでも出るかもしれないし」

「じゃ、じゃあ、蠟燭の火を持ってこうよ」

暗い顔の少年が壁に取り付けられた蠟燭を外そうとすると、冷や汗がどっと出た。

慌ててやめるように言うと、少年は怪訝な表情を見せた。

「みみ、皆さんはベスティアですし、暗くても目が見えるじゃないですか！」

「そうだけど、あんたはどうすんだ？」

「大丈夫ですよ。人間は窮地に追い込まれると何か新しい力が目覚めるものです！」

三人は一斉に冷たい視線をアルルーナに送った。
くそう、何か悔しい。

「行きますよ、あっちですね！」

幸い地面は平らだし、躓く心配はないはずだ。

女性は呆れるようにため息をつくとき、アルルーナの後を追う、二人の少年も追いかけた。

一步一步慎重に、うっかり何かに当たって怪我しないように、アルルーナはゆっくり歩いた。

三人ともベスティアなだけあって、静かに歩いているので、アルルーナの足音だけが暗い空間に響いていた。

何だか恥ずかしい。

アルルーナは口を開いた。

「私がここに入れられた時に、犯人の顔を見なかったんですか？」

「それがよお、鉄格子とやらが開く音も、足音さえしなかったんだ。あんたは、こう、何というか……」

「いきなり現れた」

「そう！ それ！」

少年二人の声が響いた。

それより、足音さえしなかった、か。

どうやら幻を見せるだけの魔術ではないようだ。

「難しいですね、今回の依頼は……うっ！」

額が何かに当たって、反動で尻もちをついた。
元々こぶが出来ていたので、悶絶してしまうほど痛かった。

「ほら、これが鉄格子だよ」

女性の声が響いた。

「ぶつかる前に言ってくださいよう……」

絶対に赤く腫れているはずだ。
目尻はかなり熱くなっている。

情けない顔を見せなくてよいのが不幸中の幸いだ。

痛む額を押さえつつ手を伸ばすと、冷たい金属に触れ、それに寄り掛かって立ち上がった。

手を上に伸ばすと、冷たい土の天井に触れた。

ここはかなり低くなっているようだ。

どこからか金属を引きずるような音が聞こえてきた。
土の壁に反響して音源が分からない。

「あの、不審な物音は立てないでいただけますか？」

「私じゃないわ」

「俺でもないぜ」

「ぼ、僕も……」

じゃあ、誰だと言うんだ？ 金属音は依然として近づいてくる。
だんだんと大きくなっていき、やがて止まった。

全員が固唾を飲んだ。

鉄格子の向こうで、蠟燭の火が灯された。

出掛かった悲鳴を飲みこんで、後ずさりしつつ燭台を持っているベスティアを見た。

大きな茶色い翼が生えていて、むき出しの腕は硬い筋肉が覆っている。

「おいおい、あんたが犯人さんかあ？」

明るい顔の少年が尋ねたが、翼が生えたベスティアは何の反応も見せなかった。

「あなたは誰なんですか？」

アルルーナが尋ねると、翼が生えたベスティアは顔だけをこちらに向け、眉間にしわを寄せた。

そして、消えたかと思うと、アルルーナのすぐ前に現れた。

「空間転移ですか。かなり高等な魔術ですね」

褒めたつもりだったが、翼が生えたベスティアの様子は変わらなかった。

「お前さえ死んでいれば……」

「え？」

翼が生えたベスティアの手が、アルルーナの喉に伸びた。

首を絞められ、足が地面から離れた。

手をはがそうとしても、びくともしない。

おまけに、私が操れるような物は何一つない。

「お前さえ、長老と共に死んでいれば……」

アルルーナの首を絞める手に力が入った。

片方の手に持った蠟燭の火が近づいてくる。

黒ずんでくる視界の端で、何かが動いた。

「おりゃああああ！」

暗い顔の少年が、翼が生えたベスティアの頭を蹴った。

アルルーナの首を絞めていた手が緩んだ瞬間に、私は脱出した。

肺に流れ込む空気に、ここまで感謝した日は無かった。

暗い顔の少年が再び翼が生えたベスティアの頭を蹴ると、その頭が吹っ飛んで壁に激突した。

その頭を暗い顔の少年は何度も蹴りつけている。

いくらなんでもやり過ぎだ！

「ああなると止められないんだよなあ……」

明るい顔の少年は首を振った。

「か、彼に何が起きたんですか？」

暗い顔の少年からはさっきまでのおどおどとした雰囲気は消え去り、逆に好戦的な性格が滲み出ていた。

しかも、暗い顔ではなく、翼が生えたベスティアの頭を踏みつけながらにやにやと笑っていた。

「あいつ、性格が二つがあるんだよ。さっきのへたれと、今の鬼

だな」

「……敵に回すと恐ろしいですね」

翼が生えたベスティアの頭は、もう原形を留めておらず、電気のようなものを発していた。

何だろう？ アルルーナはそれに近づいた。

「危ない！」

暗い顔の少年が私の前に飛び出し、拳を受け止めた。

翼が生えたベスティアが、頭を失ってなお、動いていたのだ。

「くそっ……！　どんな化物だよ！」

翼が生えたベスティアが片手に持っていた燭台を、暗い顔の少年に投げつけた。

少年は怯み、殴られて地面に沈みこんだ。

蠟燭の火が彼の横で弱々しく燃えている。

「おいおい、あいつを止めるなんてどんな腕力だよ……うわっ！」

翼が生えたベスティアの拳が明るい顔の少年をかすめた。

そして、流動した地面に弾かれて天井に当たり、地面に叩きつけられて動かなくなった。

土を操る魔術だ。

「本当に規格外なベスティアさんですね……」

頭をもがれても動いている事と言い、高等な魔術を使う事と言い、

生き物かどうかも怪しい。

「あの、戦えますか？」

「無理よ」

蛇の女性は即答した。

私も武術はさっぱりだ。

せめて水さえ湧いていればどうにかなるのだが……。

「アルルーナ！」

鉄格子の向こうから、水がぶちまけられた。

この際だ、何でもいい！

アルルーナは水を操り、刃に変えて翼が生えたベスティアをばらばらにした。

破片はそれきり動かなくなった。

「大丈夫か？」

「来るのが遅いですよ、フリードさん」

「仕方ないだろ。そいつ飛べるから追いかけるのが大変だったんだ」

「フリードさんは幻覚を見なかったんですか？」

「幻覚？」

「いえ、見ていないならいいんです。それよりも……」

奇妙なことに、どの破片からも血が出ず、代わりに細長い鉄の棒が何本も飛び出していた。

詳しい事は分からないが、確か機械仕掛けの馬にも同じような物が使われていた。

それらの破片の一つに、淡く発光しているものがあつた。

硬質な皮膚？　をはがすと、鉄の板が現れた。

光はさっきよりも少しだけ強くなっている。

鉄の板をはがすと、赤い石に生えた手のひらほどの小さな花が飛び出した。

赤い花卉に、縁がレース状になっている花だ。

「綺麗な花ね」

蛇の女性が言った。

「……そうですね」

アルルーナは花を破片から丁寧に取り出し、ポーチの中に入れた。

「フリードさん、ちょっと離れていてください」

「お、おう」

フリードがその場から離れると、アルルーナはまだ地面に染み込んでいない水を操って、鉄格子をばらばらに切断した。

そして手招きしてフリードを鉄格子の内側に来させると、明るい顔の少年の腕を持たせた。

「こいつらは？」

「行方不明者さんたちですよ。運んでくれます?」

「お前は運ばないのか?」

「ここには水しか無いんですよ? 魔術師の私が力仕事なんて無理です」

フリードは悪態をついて、少年二人を抱えて鉄格子の向こうに消えた。

アルルーナは女性に声をかけようと思って振り向いたが、そこには最初から誰もいなかったかのように、黒とうとうたる闇が広がっているだけだった。

もう出ていったのだろうか? アルルーナはフリードを追いかけて行った。

暗闇の中をしばらく歩くと、燭台が何本も壁に取り付けられた明るい空間が現れた。

行き止まりで、石を敷かれた地面には不可思議な模様が描かれていた。

一見すると、魔術陣のようだ。

「これだこれ」

「ちよつと待ってください。これ、転移魔術の一種ですよ」

「そうみたいだな。この洞窟にはこれで来たんだ」

そう言っ、フリードは魔術陣の中に足を踏み入れた。
ところが、転移魔術は発動しなかった。

「フリードさん、ちょっとどけてくれますか？」

アルルーナはフリードを強引にどかし、魔術陣を丹念に調べた。やはり、線が消えている。

フリードがこの魔術陣を踏んだ時にでも消えたのだろう。

通常、魔術を陣で保存する場合、それを形成する線が一本でも消えると効力が無くなる。

つまり、この魔術陣は魔力が入っていないただの模様だ。

だが、線を書き足せば何とかなるかもしれない。

「チョーク持ってますか？ 線を書き足したいんです」

「持ってねえよ。鉛筆じゃ駄目なのか？」

「駄目ですよ。同じ物で書かないと馴染みませんから」

万が一、違う物で書けば魔力が滞って爆発するかもしれない。

そんなことをすれば潰れたトマトのように土で圧死するのは確実だ。

元はと言えば線消したフリードが悪いのだが、今彼を責めてここから出られるわけでもない。

さて、チョークが無いのはどうしようか。

ふと、ポーチの中に入れた花を思い出した。

取り出して確認すると、やはり赤い石に生えている。

「フリードさん、これ、魔石でしょうか？」

アルルーナは赤い石をフリードに見せた。

「そうだろうなあ。何か変なもん生えてるけど……」

フリードは赤い花卉を指で擦ったり、突いたりした。
その度に、花が嫌がるように避けている気がした。

「あんまりいじらないでやってください。嫌がってますよ」

「分かるのか？」

「何となくです。とりあえず手を離してください、チョーク作りますから」

フリードは名残惜しそうに手を離れた。

アルルーナは指で土の地面に魔術陣を書き、魔石でチョークを作った。

私自身の魔力では植物と水を操る魔術しか使えないが、魔石の魔力にそういう制限は無いようで、どんな魔術でも使える。

作ったチョークで慎重に転移魔術陣を書き足していき、完成間近というところで、フリードに担がれていた二人の少年が目覚めた。

「んあ？　ここどこだ？」

「くっ、首なしベスティアは？」

「ようやくお目覚めか、とりあえず降りろ」

フリードが二人を乱暴に降ろした。

その拍子に、明るい顔の少年が魔術陣を踏み、線が何本も消された。

アルルーナは驚きのあまり顔を引きつらせ、チョークを落とした。

チョコレートは粉々に割れ、使い物にならなくなった。

「どうしたんだ？」

明るい顔の少年は悪びれる様子もなくにこやかに笑った。
今はそれが悪魔のせせら笑いに見える。

「何てことしてくれたんですか……。この魔術陣、爆発しちゃいますよ」

三人が一斉にアルルーナを見た。

アルルーナは明るい顔の少年が消した線を指さした。
私の目には、この空間内の魔力がどんどん歪んでいくのがありありと映し出されている。

「陣を書いている途中で線が消えたものですから、魔力が逆流して爆……」

「わあああ！！ それ以上言わないでください！」

「この模様消しちゃえばいいんじゃないかー？」

「成程！ やるぞ！」

明るい顔の少年に扇動された、馬鹿もといフリードと暗い顔の少年は、ものの数秒の内に魔術陣を完璧に消した。

だが、歪んでしまった魔力はそのままだ。

「一回爆発するか何かしないと、逆流して歪んだ魔力は元に戻りませんよ」

「じゃあ、どうすればいいんだよ！」

フリードが声を張り上げた。

魔力の影響で壁の土が崩れてきている。

「……成功する保証はありませんけど、方法ならあります。フリードさん、報酬の赤ブドウ酒をもう一瓶増やしてください」

「何でもいいからやってくれ！」

「了解です」

アルルーナは魔石で転移魔術を発動させた。

私の専門外だが、失敗する確率はそう高くない。

景色はどんどん変わっていき、やがて市街地のものへと変わった。

「さすが魔石ねえ」

振り返ると、さっきまでいなかったはずの蛇の女性がいた。

「どこにいたんですか？」

「ずっとあなたと一緒にいたわよ。さて、外に出られた事だし。私は帰るわね」

そう言つて、女性は踵を返し、迷路のように入り組んだ道の向こうに消えた。

ずっと一緒にいたって、一体どこにいたのだろうか？

「なあ、俺たち帰っていいか？」

明るい顔の少年が尋ねた。

「いいですよ。念の為結界を張っておきますから」

「あ、ありがとうございました……、えっと、お礼は……」

「別にいいですよ。私はフリードさんからたんまり貰います」

「じゃ、じゃあ、お元気で……」

二人の少年は、それぞれの家に帰って行った。

「フリードさん、私も家に帰りますね」

「依頼達成の報告はどうすんだ？」

「明日でいいと思いますよ。あと、赤ブドウ酒をもう一瓶用意しておいてくださいね」

フリードの顔が心なしか青くなった。

アルルーナはそれを横目で見ると、自分の家に帰った。

【国王の依頼】

翌日、ギルドに行くと、赤ブドウ酒にかけていた結界を解くのに悪戦苦闘しているシュナイダーの姿があった。

「おはようございます、シュナイダーさん」

「おお、『樹海』か。この結界を解いてくれんか？」

「いいですよ。シュナイダーさんはグラスを持ってきてください」

アルルーナはシュナイダーから赤ブドウ酒を貰い、結界を解除し栓を開け、シュナイダーが持ってきたグラスに注いだ。

ルビー色の酒を一気に喉に流し込むと、何とも言えぬ感動が込み上げてくる。

「やはり、酒の神が作っただけありますね……、美味です！」

「我輩も長く生きておるが……今までの中で最高の酒だ」

「さ、もっと飲みましょう！」

アルルーナは再びグラスに酒を注ぎ、飲み下した。

フリードが酒豪たちによる酒盛りが行われているこのギルドに着いたのは、二人が一本目を飲みほしたところだった。

「何だ、この惨状は……」

シュナイダーは床に突っ伏し、アルルーナは顔を真っ赤にして、

空になった瓶をカウンターの上で転がしていた。

まさか、あの酒を全部飲んだのか!?

一般人なら一口で酔い潰れるとまで言われた悪魔の酒を。

いくらアラウネやドラゴンが酒に強いと言っても、限度と言うものがある。

「フリード。お酒え、持ってきたあ?」

「口調変わってるぞ、おい……」

「ふひゃあ……酒え、注いで」

アルルーナがグラスを差し出した。

その手は中毒者のように震えている。

「それ以上飲むと、二日酔いで死ぬぞ」

「アルルーナは死なないんですう。さあ、注いでくださいよ」

フリードは断ったが、ギルドの端に置いてある観葉植物の蔓がうねうねと動き出し、フリードが持っている酒目掛けて近づいてくる。

「分かった! 酒は注いでやるからこの気持ち悪い蔓止めろ!」

アルルーナは含み笑いすると、蔓を元に戻した。

「聞きわけの良い人は嫌いじゃないですよお」

「はあ、どうなっても知らんぞ……」

フリードはグラスを受け取り、自分が持ってきた二本目の酒を注ぎ、アルルーナの前に置いた。

アルルーナはそれをちびちびと飲んだ。

「そういえば、お前まだ未成年じゃないのか？」

「そうだよぉ？　それが何なのぉ？」

「そんなに酒に強いってことは前から飲んでたんだろ？　親御さんに怒られなかったのか？」

フリードが言った途端、アルルーナの表情が硬くなった。

「親なんて……いなかったようなものですよぉ。アルラウネなんて大っ嫌いだー！！」

アルルーナはグラスの中の酒を一気に飲み干し、カウンターに突っ伏した。

しばらくすると、寝息が聞こえてきた。

「……二日酔いの薬でも置いてやるか」

酒はただで貰ったから報酬として出したが、一口で酔い潰れるどころか、シュナイダーよりも酒に強かったのは計算外だった。

今度はもっと弱い酒を飲ませてやろう。

ふと目が覚めて外を見ると、空が赤くなっていた。
先程の赤ブドウ酒を思い出して吐き気がする。
当分飲みたくないな。

「お前、どれくらい寝てたと思ってんだ？」

呆れ顔のフリードがいた。

「一時間くらいですか？」

「半日だ」

ああ、どうりで花が萎れていると思った。

「水だ。飲んだ方がいいぞ」

「シュナイダーさん……ありがとうございます」

「二日酔いの薬、そこに置いてるぞ」

フリードがカウンターの上の白い粉を指さした。

「知らない、とアルルーナは白い粉をフリードに返した。

アルラウネは二日酔いとは無縁の種族だ。

いくら飲もうと、健康が害されることは無い。

アルルーナは水を飲み干した。

「ところで、シュナイダーさん。その紙、昨日からずっと見てますけど何なんですか？」

「ああ、これか。陛下の依頼を受けるか否か、悩んでおったのだ」

アルルーナは驚いた。

国王陛下がこんな寂れたギルドに依頼を出すなんて。

「どういう内容なのですか？」

駄目もとで聞いてみた。

国王陛下からの依頼はほぼ命令に等しい。

命令を他言していいはずなかったのだが、シュナイダーは教えてくれた。

「ウィーンがアゼルバニアと仲が悪いのは知っておるな？」

アルルーナは頷いた。

ウィーンは私たちが今いる国、アゼルバニアはウィーンのすぐ南に位置する国だ。

「実は、アゼルバニアが生物兵器を開発してウィーンに攻めようとしていると、スパイから連絡があった」

「生物兵器……？ 新種の人間でも作ったのでしょうか？」

アルルーナはおとぎ話の中の人間を思い浮かべた。

「いや、どうやらアルラウネが関係しておるようだ。その研究所も、アルラウネの村の跡地にある。その偵察だ」

アルルーナはシュナイダーが何を言ったのか、一瞬分からなかった。

アゼルバニアの兵器にアルラウネが使われている？

村があつた場所にずけずけと入り込んできて研究所を作った？
アルルーナは無意識に拳を握りしめた。

「私も連れて行つて下さい。お願いします！」

アルルーナは懇願した。

もしかしたら長年の悲願を達成できるかもしれない。

「ああ。そなたの協力も仰ぐようにと、これに書いておつた」

シュナイダーに手渡された紙には、確かに『樹海』の協力も仰ぐ
ようにと書いてあつた。

「私がラルヴァに來たのはこの間なのに、よく居場所を掴めました
ね」

「そなたの評判はよく城で話題になるからな」

評判か……あんまり深く考えないようにしよう。

「出立は明日だ。準備をしておいてくれ」

「俺も行く！」

フリードが名乗りを上げた。

シュナイダーは彼を厳しい目で見た。

「弱い者を連れては行けぬ」

フリードはちらりとアルルーナを見ると、シュナイダーに視線を

戻した。

「俺はアルラウネの花が――アルラウネが何故滅んだのか知りたいんだ」

シュナイダーはフリードの顔を見て、笑いをこぼした。

「フリードよ。お前は嘘をつくのが下手すぎるようだ。『樹海』の花が欲しいのだろう？」

「そうそう……って、マスターはこいつがアルラウネだって……」

「気付いておった」

驚いてアルルーナは目を見開いた。

理由が知れたそうなアルルーナにシュナイダーはこう言った。

「我輩は人間の何倍も感覚が鋭い。初めて会ったときに、そなたからは花の香りがしたのだ」

「こ、香水かもしれませんよ？」

「あのような水と、純粋な花の香りを間違えるはずないであろう」

自信満々に言い放ったシュナイダーにアルルーナは何も言い返せず、うなだれた。

まさかフリードだけでなくシュナイダーにもばれていたとは、迂闊だった。

「安心するがいい。そなたがアルラウネだとは口外せぬ」

「ありがとうございます……」

もう、ありがたいんだかわからないな。

髪を切って、馬にまで乗るようになったのにこうもあっさり見破られるなんて。

その後、フリードは同行を許され、アルルーナたちは明日の準備のために解散した。

まだ夜も明けてない頃に、アルルーナたちはギルド前に集まった。短く挨拶を交わして、馬に乗ってラルヴァから出た。しばらく馬で駆けていると、太陽が地平線から出てくるのが見えた。

私が大切な人を奪った奴らに復讐すると決めた日と、何も変わらない夜明けだった。

アルルーナたちは、ほとんど休みなしで馬を駆り続けた。

魔力が無いフリードも、魔石を大量に持っていたので大丈夫だった。

丸二日経って、ようやく研究所がある山に着いた。

山は最後に見た時よりも、鬱蒼としているような気がした。

「馬はここで置いていく」

シュナイダーが馬から降り、アルルーナとフリードはそれに倣った。

「それにしても、化け物でも出そうなくらい木が茂ってるな」

フリードが言った。

「アルラウネがいなくなって、山を手入れする人間がいなくなったからですよ。あ、フリードさん。右に曲がってください」

「へ？」

フリードはアルルーナの忠告も聞かず、真っ直ぐ進んだ。

糸が張る音がして、フリードは片足をつり上げられた。

フリードはすぐに、持っていたナイフで足に絡まったロープを切り、背中から地面に落ちた。

「いてて……一体なんなんだ？」

「罨がまだ残ってるんですよ。運が悪かったら木の杭が飛んで来てました」

フリードの顔がさっと青ざめた。

「これは、アルラウネが仕掛けたものか？ 随分古いもののようにだが……」

シュナイダーが切られたロープを拾い上げた。

元は茶色だったロープの色はくすんで灰色になり、ところどころ細い糸が切れていた。

「対密猟者用の罨です。何十年でも保つようと、皆必死で仕掛けてました」

「……そうか。この山の道案内を頼めるか？ 例え我輩でも罨全てを把握するのは無理だ」

「はい、まかせてください。こっちです」

すでに解除されている罨もあったが、ほとんどがそのままの状態が残っていた。

アルルーナとシュナイダーは罨にかかることは無かったが、フリードだけはよく逆さづりにされていた。

「フリードさん、左に寄ってください。その罨は……」

「いてっ！ 何だこれ、桶!？」

桶が鈍い音を立ててフリードに当たった。

本当は桶の中に水が入っていたが、さすがにもう無くなっていた。

「くそっ……」

「もうすぐ研究所があるはずです。隠れましょう」

アルルーナたちは茂みに隠れて、そろそろと近づいていった。

元は村があった開けた場所には、大きな白い建物が建っていた。

その入り口付近に、研究者らしき人物が二人いて、その向こうにベスティアが一人立っていた。

二人の内一人の茶髪の男が、ベスティアの胸に当たる部分を開いた。

その中には、赤い石があり、それに一輪の花が生えていた。

あの洞窟で出会った翼の生えたベスティアと同じだ。

あれが兵器なんだろうか。

もつとよく見てみよう。茂みから身を乗り出すと、不覚にも落ちていた枝を折り、物音を立ててしまった。

もう一人の研究者、緑色の髪の子が振り返った。

否、女じゃなくて男だった。

長髪を後ろで一つに結び、長い前髪からは黄緑色の瞳が覗いている。

右側の頭部には小さな青い花が咲き誇っていた。

「ディーノ……？」

懐かしい名前を口に乘せ、声に出す。

アルルーナは茂みから出た。

彼は信じられないという顔でアルルーナを見つめ、手に持っていたカルテを落とした。

どれくらいの間、見つめ合っていたのかは分からない。

突然、茂みから飛び出したシュナイダーがアルルーナを手刀で気絶させた。

これ以上姿を長居するのは危険だったからだ。

シュナイダーは氣を失ってぐったりしたアルルーナを抱え、同じく茂みから飛び出したフリードに耳打ちした。

「引くぞ」

「了解」

フリードたちは来た道を早足で戻った。

麓に着いてフリードは急いで馬に魔力を食べさせようとしたが、マスターに止められた。

「我輩が元の姿に戻った方が早い。『樹海』を頼むぞ」

フリードにアルルーナを手渡すと、シュナイダーの体が輝き始め、一つの小山のような大きさのドラゴンの姿になった。

フリードは卒倒しそうになったが、なんとかこらえた。

シュナイダーは体勢を低くして、背中に乗るように促した。

フリードたちが背に乗ったのを確認すると、シュナイダーは四枚の翼で羽ばたき、あっという間に地面が遠くなった。

「あ、馬は!?!」

「心配いらぬ。我輩が持っておる」

前足か後ろ足で持っているのだろう。

怖すぎて確認出来ないが。

しばらく経つと、アルルーナの瞼が動き、目を開けた。

「デイ、ディーノは!?!」

アルルーナはきよろきよろと周りを見渡し、地面よりはるか上空にしていると知ってぶるぶる震えだした。

「ななな何で、私はこここんな場所にいるのでしょうか?」

声が震えている。

そういえば、アラウネは高所恐怖症だったか。

馬は克服したようだが、こんなに高い場所は初めてだろう。覚られないようにしているが、フリードも足が震えている。

「ま、マスターの上だ。ド——元の姿で行く方が早いってな」

フリードはドラゴン、と言いかけてあわてて言い直した。
振り落とされでもしたら洒落にならない。

「起きたか、『樹海』。詳しい話はギルドで聞かせてもらう」

シュナイダーの重低音が耳に響いた。

アルルーナは目を伏せ、短く、はいと答えた。

シュナイダーはゆっくりと降下し始めた。

下にはラルヴァが見えている。

「……城の方に撃たれたりはしないんですか？」

「王には、もしかしたらこの姿で帰るかもしれないと前もって言うておった」

シュナイダーは城壁の隣に降り立つと、フリードたちを下ろして、人の姿になった。

馬がガシャンと音を立てて落ちた。

「おお、忘れておったわ」

マスターは陽気に笑った。

だが、貧乏人のフリードには笑いごとではない。

見ると、フリードの愛馬の足がぼっきり根元から折れて、だらしなく揺れていた。

ああ、俺の一ヶ月の給料が飛んだ。

「フリードさんの馬は安物なんですね。こんなに簡単に壊れるなんて」

「うるさい。何でお前らはそんな高い馬が買えるんだよ……」

アルルーナの黒毛の馬は安く見積もっても金貨一枚はいくし、シュナイダーの栗毛の馬は特注でアルルーナの馬より高い。ちなみにフリードの一ヶ月の稼ぎは銀貨三枚程度だ。それでも一般人より多い。

「一回上級の依頼でも受けてみたらどうですか？　良い馬買えますよ」

「俺を殺す気か……」

マスターといい、アルルーナといい、何故『フォンスフラワー花の泉』には強い魔術師ばかり集まってくるのだろうか。

「フリード、馬は弁償してやろう。忘れておった我輩が悪いのだしな」

今ほどシュナイダーが輝いて見えた瞬間はなかった。

フリードは思わずシュナイダーを拝みそうになった。

シュナイダーはフリードを哀れみを込めた眼差しで見ると、踵を返して城門に向かって歩き出した。

二日ぶりのギルドの前には、人だかりが出来ていた。

おそらく依頼者だろうが、少し数が多いような気がする。

シュナイダーの姿を確認すると、全員がシュナイダーに詰め寄った。

依頼を受けてもらおうと必死のようだ。

「シュナイダーさん！　二日もどこに行ってたんスカ！」

「悪いが明日にしてほしい」

「急を要するっス！」

「一日も待てぬのか。人間とはせっかちなものよ」

シュナイダーの目がドラゴンの縦長の目になり、その目で睨みつけられた依頼者は蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。

「少しやりすぎなんじゃないですか？」

「あれぐらいが丁度よい。明日には懲りずにまた来るであろう」

静かになった道を後にして、フリードたちはギルドに入った。
一つのテーブルを囲んで座ると、シュナイダーの顔が真剣な面持ちになった。

アルルーナは水を取り出して口に含んだ。
どうやら長い話になりそうだ。

「『樹海』よ。いくつか聞いても良いか？」

アルルーナがどうぞ、と促した。

「あのベスティアについて、何か知っているか？」

「いいえ。でも、中に入っていた花の正体なら分かりますよ。あの花はアルラウネのものです」

アルルーナは翼の生えたベスティアの中に入っていた魔石を出し

た。

「これもそうです。多分、あの生物兵器とやらは花の魔力で動いているんだと思います」

「じゃあ、アルラウネを滅ぼしたのはアゼルバニアなのか!？」

フリードは声を荒げた。

だが、アルルーナは妙に落ち着いていた。

「……アゼルバニアがアルラウネを滅ぼした——間違っではないでしょうね。フリードさん、魔石はどうやって手に入れてたんですか？」

「商人から買っていた」

「その商人、アゼルバニアの人間でしょうね。花が枯れたりした欠陥品を売りに来ていたんでしょう」

「もう一つ、聞きたい事がある。ディーノとは誰の事だ？」

シュナイダーが尋ねた。

「ディーノは……」

アルルーナは言葉を切った。

「ディーノは、私と同じアルラウネです。ベスティアの前にいた緑色の髪の男性がそうです」

「……同胞を使って、兵器を作ったのか」

「そんなはずありません！」

アルルーナが立ち上がり、バンツとテーブルを叩いた。

「あくまで可能性の話だ」

「……すいません」

「我輩は国王陛下に報告してくる。解散」

シュナイダーがギルドから出ていった。

アルルーナは下を向いて、動き出す気配はない。

静寂の中、ギルド内に大量に置かれている花に群がる蜂の羽音が、壁に染みいるように響いていた。

「アルルーナは、アゼルバニアが憎いか？」

「……どうしてです？」

「アルラウネは、アゼルバニアのせいで滅んだんだ。憎くないのか？」

アルルーナは顔を上げた。

「別に憎くなんてありませんよ。ディーノはアゼルバニアの研究所で生きてました。逆に、感謝していますよ」

「……そうか」

「そうですよ。私は用があるのでこれで失礼します」

そう言って、アルルーナはギルドから出て行った。
その後ろ姿は心なしか、憂愁を帯びていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2983x/>

華と赤ブドウ酒

2011年11月8日20時03分発行